

月刊 新医療

2014 January

No.469 1

New Medicine in Japan

●総特集

トップに問う—超高齢社会と病院インフラ

人口構造が病院経営・運営に大きな影響を与えるのは自明であるが、では超高齢社会を迎えた今、設備、IT環境、機器等の整備は如何にあるべきか

●特集

低被ばくCTは検診を変えるか



日本初の循環器専門クリニックである高瀬クリニック(群馬県高崎市)では、最新機能を搭載した血管撮影装置やADCT、1.5T MRIを活用して最先端の循環器医療を実施している(詳しくはグラビア頁)。同クリニックの前で、高瀬真一院長◎と循環器科医の加藤 修氏

[特別企画]

動画像ネットワークの臨床効果を検証する

[データ]

動画像ネットワークシステム設置施設名簿

放射線治療関連機器・システム設置施設名簿 [Part2]

マンモグラフィ設置施設名簿 [Part2]

FPD搭載デジタルX線撮影装置設置施設名簿 [Part2]

単なる機能回復ではなく完全な社会復帰を目指し、 住生活環境の再現を含め院内随所に工夫を凝らす。 まさに地域医療完結のための不可欠な存在となる

旧病院時代より、リハビリテーション医療において建築に寄せる期待は大であった。果たして、昨年、竣工を迎えた新病院でもその熱い思いは変わらず、随所に配されている、経験に裏打ちされた工夫、知恵には驚かされる。目的は、形だけの機能の回復にとどまらぬ積極的な社会復帰。超高齢社会が進展しようとしている今、是非、注目したい病院のひとつだ。

選者／考察者 岩堀幸司（建築家）



- 01. 医療安全重視の視点から、バリアフリー、院内感染対策を徹底して、高齢者や障害者、周辺環境にもやさしい造りになっている
- 02. 廊下の幅を十分にとり、車椅子でも楽に移動ができる外来待合
- 03. 外来ホスピタルギャラリー、彩色絵物語など心安まる展示

写真：建築写真ハシモト事務所



意欲的なリハビリへの取り組み

今回紹介する熊本託麻台リハビリテーション病院の前身である医療法人堀尾会熊本託麻台病院は、熊本市内唯一のリハビリテーション専門病院として1977年に創設された。当時はまだ大学病院ですら、受診時に靴をスリッパに履き替えていた時代であったが、理事長の堀尾慎彌氏は、強い信念のもと、バリアフリーの病院を造ったことでリハビリテーション医療の世界で広く知られる。堀尾氏は、建物の設計者を前にして、リハビリテーションの

意味から始まって、障害を持ちながら残存機能を改善していく過程や健常者が普通にこなせることが患者にとっていかに困難なことかを熱く語ったという。

以来、同病院は地域リハビリテーション医療、特に小児リハビリにおける先駆的な取り組みを数々行い、当該領域の牽引役として注目されてきた。

しかし、築後35年を経て、耐震性能の問題、機能面での課題を抱えるのに加え、都市計画の見直しにより容積率の問題から既存不適格になってしまった。

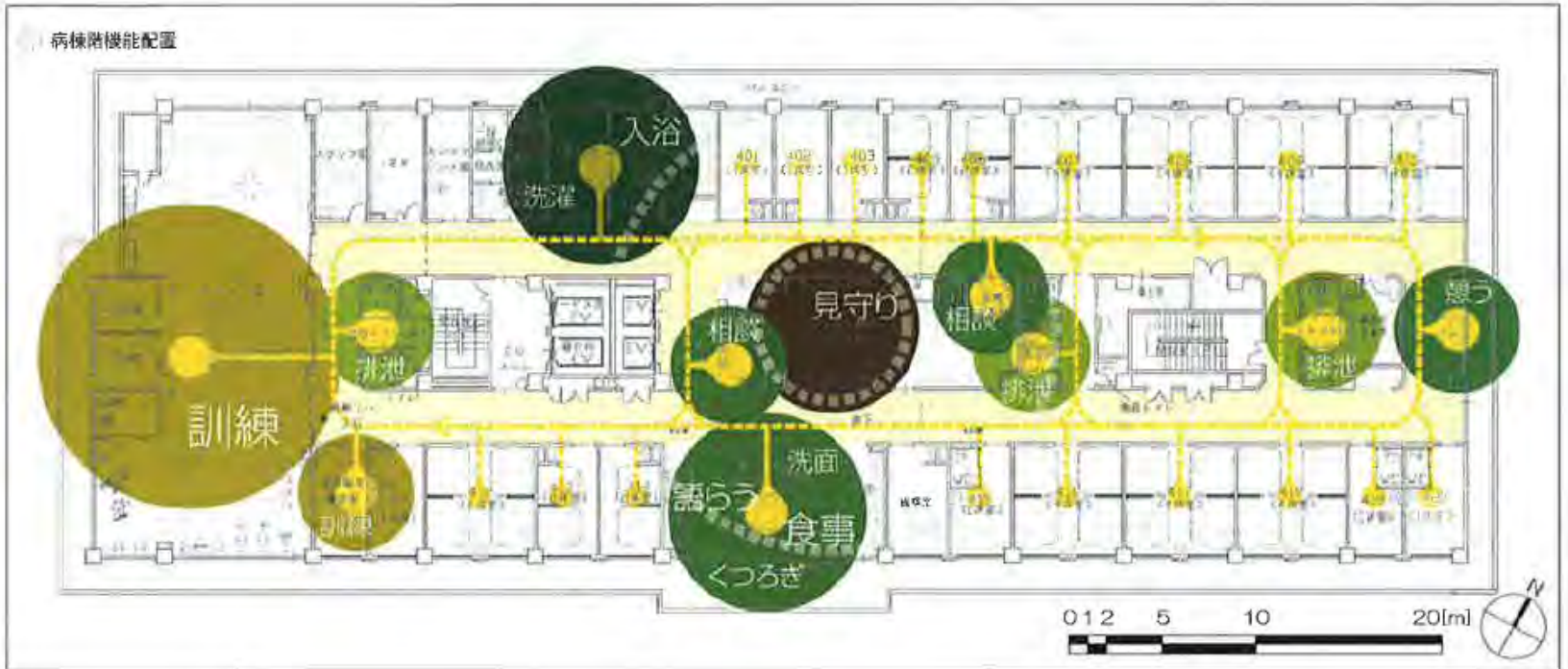
同病院は、それを機に、移転新築を行い、熊本託麻台リハビリテーション病院と名称も新たに、2013年5月、急性期病院から早期に患者を受け、亜急性期から回復期に対応するリハビリテーション医療の提供を開始したのである。

特徴的な病棟の機能配置

新病院では一般病床を減らし、従前全142床のうち58床だった回復期リハ病棟を一般病床1病棟と入れ替え、2病棟94床を増床し、機能回復医療の充実を図った。

同病院のリハビリテーション医療の目指すところは、単なる

医療法人堀尾会
熊本託麻台 リハビリテーション病院
所在地：熊本県熊本市中央区帯山8丁目2-1
【建築概要】
工期：2012年3月～2013年3月
構造規模：鉄筋コンクリート造、5階一部6階
延床面積：10,517.39㎡
設計監理：佐藤総合計画 施工：清水建設



機能回復にとどまらず、障害を持つ人々が積極的に社会参加できるようにすることだ。新病院の建屋は、そのためにも実際の「住生活環境」を随所に配していることが特徴といえる。

例えば病棟の機能配置である。「移動も訓練の一環」という考えによって、食事・入浴・排泄などの日常的な行為や憩いの場を回遊式の複数の廊下に面して適度に分散配置させている。その結果、目的の場所へ行くためには、適度な距離を移動しなければならぬようになってきているのである。

そのために、回遊式廊下自体を楽しめるトレーニング空間とすべく、距離を表示する目印やアクセントカラーを適度にデザ

インし、移動する苦労を和げる演出が施してある。

こうした配置は、急性期病棟での段階的病室配置構成とはまったく異なるものだが、リハビリテーション病院の中では珍しい造りであり、同病院の特徴のひとつといえよう。

また、各病棟フロアには200㎡という広大なリハビリ訓練室が確保されているのも注目に値する。

同病院は、熊本市内第1号のバリアフリー法認定特定建築物の承認を受けているが、単にバリアフリーではないのも興味深い。例えば、病室、トイレ、浴室などは、左右どちらの麻痺患者でも使用しやすいレイアウトにしていることなどは、その典

型であろう。なお、このレイアウトは患者だけでなく、スタッフにとっても介助がしやすいと好評という。ちなみに浴室は、すべて個浴を目的としたレイアウトになっている。

※

熊本市は、全国有数の地域医療連携モデル地区として注目されるが、同病院が新規オープンしたことで、急性期医療のみならず、回復期及び生活維持期のリハビリテーション医療が充実することになった。その結果、急性期・回復・維持・在宅までシームレスな連携が実現したのである。

地域完結医療が叫ばれる中、同病院の取り組みは地域医療連携の好ましい形といえよう。

04. 明るい木調とアクセントカラーでデザインされたスタッフステーションカウンター
 05. 病棟部分3～5階の各フロアに配置されている200㎡の広いリハビリテーション室
 06. ベッドサイドリハにも十分なスペースの4床室
 07. 障子を介した柔らかな光で安らぐ個室